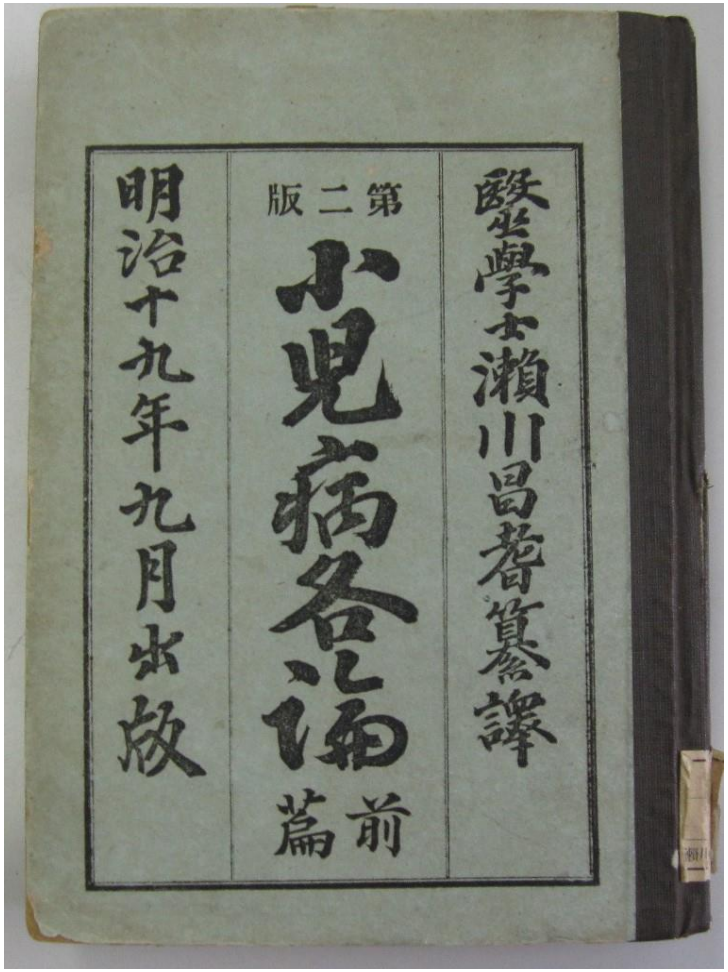
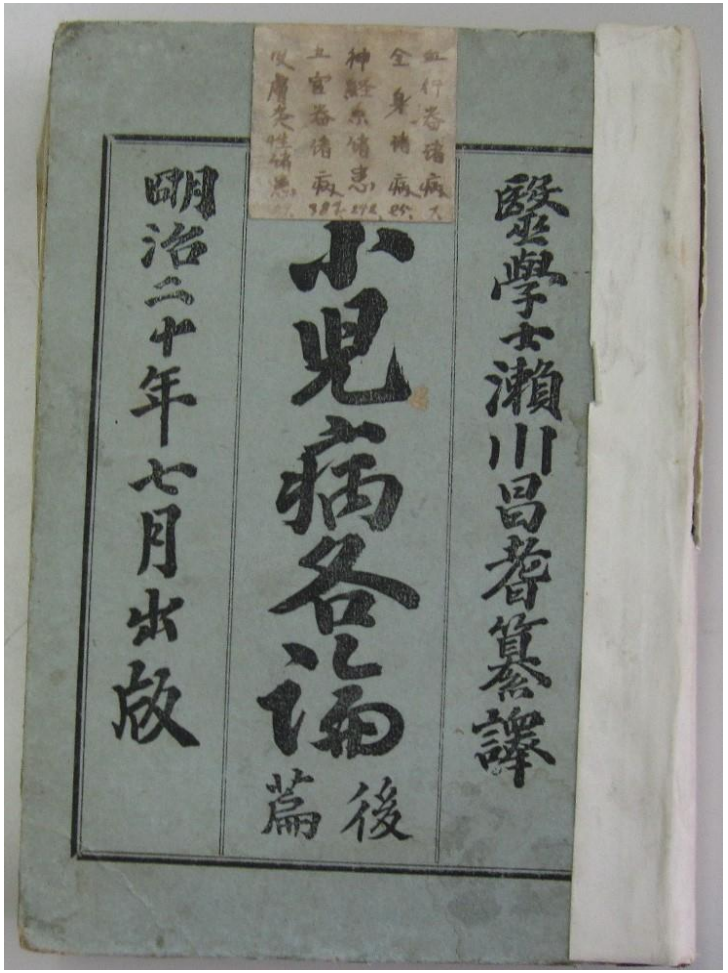
瀬川昌耆先生（第6代目）著の『小児病各論』が日本最初の独自編纂小児科学教科書でした

当研究所に所蔵してある6代目瀬川昌耆著『小児病各論』第二版（前編明治19年出版、後編明治20年出版）について一般社団法人日本医史学会（順天堂大学医学部医史学研究室内）にご協力いただき調査したところ、初版（前編明治17年出版、後編18年出版）が小児科学教科書としては“日本最初の西欧医書の翻訳ではない日本独自編纂の書籍”ということがわかりました。
明治時代初期から中期にかけてはスタイネル著 長谷川泰訳「斯泰涅爾小児科」（明治9年）や東京大学小児科学教室初代教授の弘田長著「児科必携」（明治21年）なども出版され近代小児科学が大きく発展しました。

（参考）『日本児科史』河内全節編（1898年/明治31年 ）　『日本医学史』富士川游（1904年/明治37年）
『日本小児科史』富士川游（1912年/大正1年）　『日本小児科医史』珠玖捨男著/南山堂（1964年/昭和39年）





小児病各論 前編/後編　第2版　瀬川昌耆著

一般社団法人瀬川小児神経学研究所内保管

『小児病各論』瀬川昌耆 著　明治17年出版

江戸時代後期から明治時代初期にかけて西洋医学の小児科書が翻訳出版される中、6代目瀬川昌耆は明治17年に翻訳ではなく日本語で書かれた最初の小児科学教科書を出版し、その後の近代小児科学の発展に大きく貢献しました。

下記の資料には『小児病各論』についての記述が掲載されています。

小児病各論 前編　瀬川昌耆著（1884年/明治17年）
出典：国立国会図書館ｳｪﾌﾞｻｲﾄ
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/835482

『日本児科史』河内全節編（1898年/明治31年 ）
（国立国会図書館ｳｪﾌﾞｻｲﾄ https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/835491 ）

“明治十七年十二月瀬川昌耆小兒病各論二巻ヲ纂譯シ明治二十一年十月弘田長兒科必携一巻ヲ纂著ス小兒科學之ヨリ漸ク盛ナリ”

『日本医学史』富士川游（1904年/明治37年）
（国立国会図書館ｳｪﾌﾞｻｲﾄ https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833360 ）

“明治九年長谷川泰、スタイネル、小児科學ヲ譯述シ、次デ、明治十七年瀬川昌耆小兒病各論ヲ著ハシ小兒科ノ學術ハ、漸ク進歩セシガ、”

『日本小児科史』富士川游（1912年/大正1年）
（国立国会図書館ｳｪﾌﾞｻｲﾄ https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/934376)

“西洋醫方ノ小兒科二ハ、明治九年長谷川泰ノスタイネル小兒科書ヲ譯述セルアリ、高松凌雲ノ保嬰新書ヲ譯述スルアリ、次デ瀬川昌耆ノ小兒病各論（明治十七年）アリ、西洋醫方ノ小兒科ハ漸ク世人ノ注目ヲ喚クニ至りシガ、”

『日本小児科医史』珠玖捨男著/南山堂（1964年/昭和39年）p149

“この著書はホーケル、バギンスキー、ゲルハルド、ヘノッホ等の諸書を引用し、当時宮城県医学校一等教諭であった著者が自己の経験を加え著した”

日本児科史　河内全節編（1898年/明治31年）
出典：国立国会図書館ｳｪﾌﾞｻｲﾄ
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/835491

方延年中ヨリ慶應三年迄江戸ニテ小兒科醫ヲ以テ目セラレシモノ左ノ如シ

飯田町	高野尚斎（[illegible]二年十二月廿五日没ス[illegible]）	神田	小原済本
四谷	小嶋治磁	芝	羽倉宗安
本郷	同　桐陰（[illegible]）	築地	所澤發眞
飯倉	清家玄洞	神田	松島碩[illegible]
湯島	竹内元正	駒込	飯島方庵
築地	柴田方庵		
番町	高島祐庵	麹町	河内全節

此外猶有ルヘシト雖モ多クハ明治ノ初年鬼籍ニ登リシ〻ナルヘシ

維新前徳川ノ御醫并典薬寮ニハ小兒科専門ノ醫アリキ然レトモ公ニ小兒科ノ名目ハ設ケサレアリシ山科太田西尾三家ハ世々小兒科醫トシテ其名京畿ニ聞ヘタリ

明治聖代ニ至リ古醫方漸ク頽レ而カモ新醫學ノ小兒科學ハ其進歩遅々タリキ

明治八年五月淺田宗伯野田昌吉高島祐啓清川玄道及ヒ予等五人毎月三回ツヽ醫學研究會ヲ催シ各自其專門ヲ研究ス則チ高嶋氏ト余トハ小兒科ヲ專攻シ高嶋氏ト先人ノ集録セル保赤議求全書ヲ補遺訂正シ余ハ多紀先生ノ雑病廣要ノ體裁ニ倣ラヒテ兒科廣要十巻兒科廣要補翼三巻及痘科廣要三巻ヲ撰ス

明治八年長谷川泰斯[illegible]譯小兒科二巻ヲ譯ス是ヨリ先キ小兒全科ノ翻譯アリ[illegible]九年高松凌雲保嬰新書二巻ヲ譯ス

新醫學ノ小兒科漸ク此域ニ至リタリ但人ノ未タ注意ヲ惹ケサリキ

明治十年高嶋祐啓育嬰新書一巻ヲ撰ス

此書ハ小兒發育法ヲ記シテ其父母ヲ敎誨シタルモノ[illegible]ノ小兒衛生ニ報ス

明治十七年十二月瀬川昌耆小兒病各論二巻ヲ纂譯シ明治二十一年十月弘田長兒科必携一巻ヲ纂著ス小兒科學之ヨリ漸ク盛ナリ

明治十八年ニ尾張名古屋ノ人小兒科醫村瀬豆洲幼々家則五巻ヲ撰ス

本書ハ初生嬰兒ヨリ終ニ痘瘡ヲ除ス其中名古屋ノ方言早手ト云ヘル地方病ヲ記セシハ大ニ價値アルモノト云フヘシ

古傳方ヲ奉スルモノニシテ　皇太子殿下及ヒ　皇子　皇女ノ御附醫師タリシモノヽ姓名ヲ揭ゲレハ左ノ如シ

記間産科論（エルレメレンス講述）小林義直ノ産科摘要等アリ、西洋産科ノ書ノ飜譯セラレタルモノ尠カラズ、ボードインノ再ビ來朝スルヤ、途次英國ノスペンセル、ウエルスニ學ビ、其卵巢截除器ヲ齎ラシ、大阪醫學校ニ其講筵ヲ開キタリト云ヘドモ、婦人科專門家ノ外國ヨリ來タリシハウエルニヒヲ以テ嚆矢トス（傳ハ內科ノ條下ニ出ツ）。ウエルニヒハ伯林大學婦人科産科ノ講師タリシ人ニシテ、明治七年ホフマンノ後任トシテ我邦ニ來タルヤ、內科ニ兼ネテ婦人科産科ノ講筵ヲ擔當シタリ。次デベルツ來朝シテ（明治九年）ウエルニヒニ代ハリ、內科ニ兼ネテ婦人科産科ノ講義ヲ擔當セシガ、此間櫻井郁二郎ノ通學生ニ婦人科産科ヲ教授スルアリ、山崎元脩ノ婦人病論ヲ著ハセルアリ、明治十二年、米國トーマスノ書モ譯述セラレテ婦人科産科ノ學術ハ漸ク進捗セシガ、明治十六年清水郁太郎、獨逸國ヨリ歸リテ、婦人科産科ノ教授ニ任ゼラルルヤ、別ニ婦人科教室ヲ設ケ、産室ヲ備ヘ、學說ノ外ニ臨床講義ヲモ開キ、斯科ノ面目一新シタリ。幾モナク清水病歿シベルツ又兼テ其講座ヲ擔當シ、明治二十一年濱田玄達ノ獨逸國ヨリ歸リテ、其講座ヲ擔當シ、婦人科産科教室ハ始メテ整備スルニ至レリ

小兒科

小兒科

明治九年長谷川泰、スタイネルノ小兒科學ヲ譯述シ、次デ明治十七年瀨川昌耆小兒病各論ヲ著ハシ小兒科ノ學術ハ、漸ク進歩セシガ、明治二十一年東京醫科大學ニ小兒科ヲ置キ、獨逸國ニ小兒科ヲ修メテ歸朝セル弘田長ヲ擧ゲテ其教授ニ任ジタルヨリ、其學益々盛トナリ、我邦小兒ノ疾病ニ就キテ研究シタルモノ尠カラズ、次デ各高等中學校醫學部ニ小兒科アリ、明治二十八年福岡縣病院ニ小兒科ヲ置キテヨリ、府縣病院ニシテ小兒科ヲ內科ヨリ分離セルモノ尠カラズ、此年十二月小兒科研究會成リ兒科雜誌ノ刊行アルニ至レリ

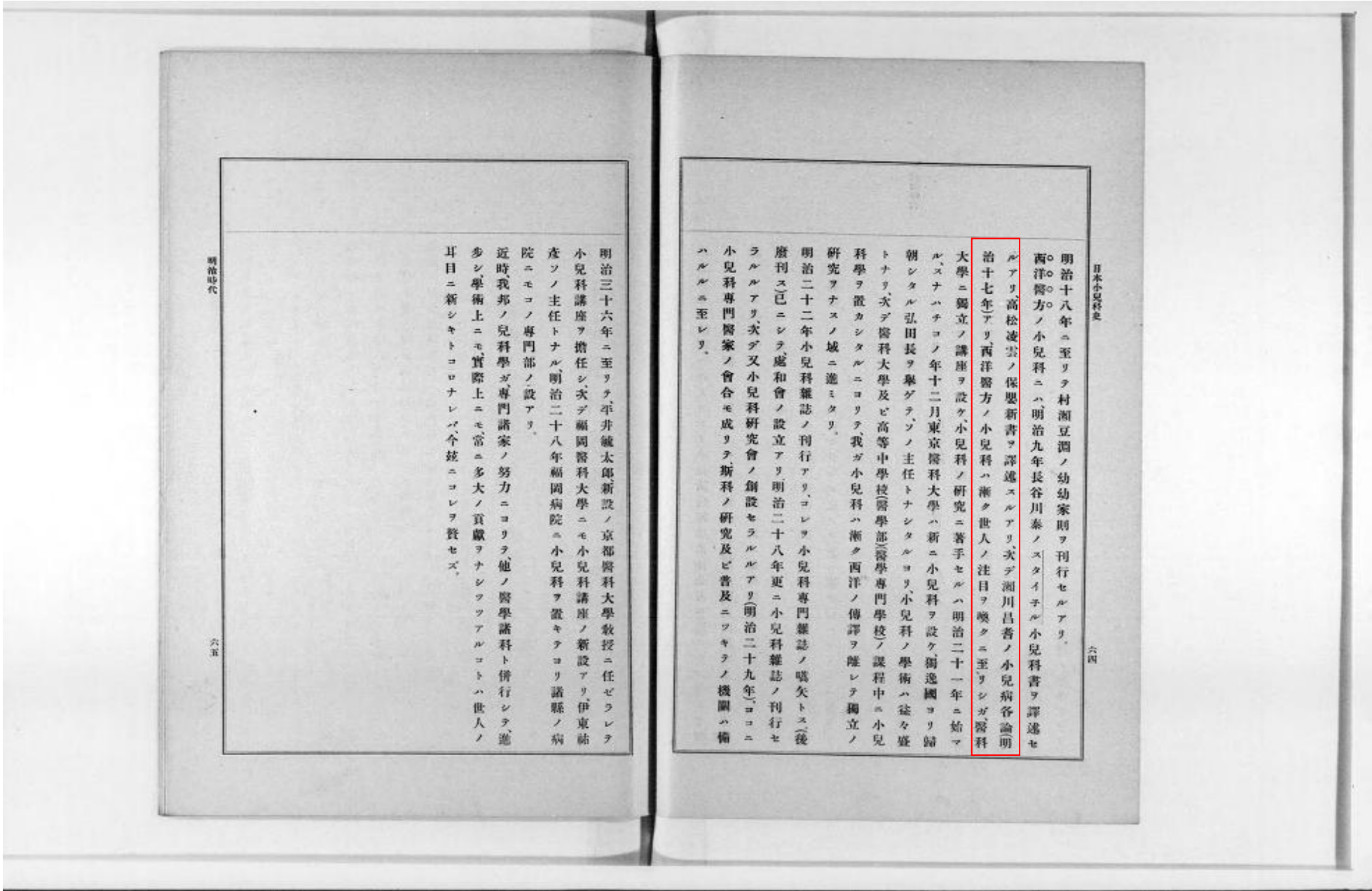
耳鼻咽喉科

耳鼻咽喉科

明治九年柏原學而、米醫グロッスノ耳科書ヲ譯シ、之ヲ耳科約說ト題シテ世ニ行ヒシニ次キテ吉田顯三ノ耳科約說（明治十七年刊）アリ、長町耕平ノ耳科約說（明治十九年）アリ、飯高芳康ノ耳科攬要（明治二十二年）アリト雖モ、西洋諸家ノ所說ヲ傳

日本小児科史　富士川游著（1912年/大正1年）

出典：国立国会図書館ｳｪﾌﾞｻｲﾄ
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/934376



明治十八年ニ至リテ村瀬豆酒ノ幼幼家則ヲ刊行セルアリ。

西洋醫方ノ小兒科ニハ、明治九年長谷川泰ノスタイチル小兒科書ヲ譯述セルアリ、高松凌雲ノ保嬰新書ヲ譯述スルアリ、次デ瀬川昌耆ノ小兒病各論（明治十七年）アリ、西洋醫方ノ小兒科ハ漸ク世人ノ注目ヲ喚クニ至リシガ、醫科大學ニ獨立ノ講座ヲ設ケ、小兒科ノ研究ニ著手セルハ明治二十一年ニ始マル、スナハチコノ年十二月、東京醫科大學ハ新ニ小兒科ヲ設ケ、獨逸國ヨリ歸朝シタル弘田長ヲ舉ゲテ、ソノ主任トナシタルヨリ、小兒科ノ學術ハ益々盛トナリ、次デ醫科大學及ビ高等中學校（醫學部）（醫學專門學校）ノ課程中ニ小兒科學ヲ置カシタルニヨリテ、我ガ小兒科ハ漸ク西洋ノ傳譯ヲ離レテ獨立ノ研究ヲナスノ域ニ進ミタリ。

明治二十二年小兒科雜誌ノ刊行アリ、コレヲ小兒科專門雜誌ノ嚆矢トス（後廢刊ス）已ニシテ、處和會ノ設立アリ明治二十八年更ニ小兒科雜誌ノ刊行セラルルアリ、次デ又小兒科研究會ノ創設セラルルアリ（明治二十九年）、コヽニ小兒科專門醫家ノ會合モ成リテ斯科ノ研究及ビ普及ニツキテノ機關ハ備ハルルニ至レリ。

明治三十六年ニ至リテ、平井毓太郎新設ノ京都醫科大學教授ニ任ゼラレテ小兒科講座ヲ擔任シ、次デ福岡醫科大學ニモ小兒科講座ノ新設アリ、伊東祐彥ソノ主任トナル。明治二十八年福岡病院ニ小兒科ヲ置キテヨリ諸縣ノ病院ニモコノ專門部ノ設アリ。

近時我邦ノ兒科學ガ專門諸家ノ努力ニヨリテ、他ノ醫學諸科ト併行シテ、進歩シ學術上ニモ實際上ニモ常ニ多大ノ貢獻ヲナシツツアルコトハ世人ノ耳目ニ新シキトコロナレバ、今玆ニコレヲ贅セズ。

日本の小児科書の歴史

1700年代　**宇田川榛斎**(1769年～1834年)がスウェーデンの医家ローゼンスタインの小児科書を翻訳し、日本の西洋小児科学が始まるが、出版はされず。

1843年（天保4年）　**『幼幼精義』フーフェランド著　堀内素堂訳**
明治初期に及ぶまで広く小児科の教科書として用いられた。石原明（wikiより、1924年～1980年医学者、著書『医史学概説』『日本の医学 その流れと発展』等）が“西洋小児科の創始は実に天保14年”と定めて良いとまでいっている程、本邦近代西洋小児科学に於いて銘肝すべき医師ならびに著書。
日本最初の西洋小児科翻訳書（朝日日本歴史人物事典）、日本初の小児科医書（市立米沢図書館）と記載あり。

1855年（安政2年）　**『婦嬰新説』ハブソン著　三宅良斎訳**
産科、小児科につて論じている。

1875年（明治8年）　**『母親の心得』ドクトル・クレンケ著　近藤鎮三訳**
産婦および乳児の心得、乳母のこと、乳を止めて他の食糧に慣れしむる法等が書かれている。

1876年（明治9年）　**『育児小言』パイヘン・リチャース著　沢田俊三訳、松本順閲**
飲食並乳母のこと、育児のことを主としてある。

1876年（明治9年）　**『斯泰涅爾小児科』スタイネル著　長谷川泰訳**
スタイネルの小児科書を長谷川泰が訳す。各器官各系について詳述している。

1878年（明治11年）　**『医事抄』石黒忠悳著**
芥子泥湿布の付け方等、治療家の日用の医学的な小事を記述。

1878年（明治11年）　**『小児療育心得』石田勝信著**
人工栄養法を詳述。

1881年（明治14年）　**『育児須知』杉山由啓著　橋本綱常閲**
妊娠中の注意や産後の手当て、育児についての指導書。

1884年（明治17年）　**『内科医範』中浜東一郎・菅之芳両学士著**
この中にドイツのホーケル小児科書の引用記述が載せられている。

1884年（明治17年）　**『小児病各論』瀬川昌耆著**
ホーケル、バギンスキー、ゲルハドル、ヘノッホ等の諸書を引用し、当時宮城県医学校一等教諭であった著者が自己の経験を加え著した。前編は初生児疾患、消化、呼吸、泌尿、生殖器病について述べ、常用薬および小児に適応する用量、用法ならびに極量まで記載している。後編は血行、伝染、全身、神経、五官および皮膚について詳述。

1885年（明治18年）　**『人口育児法』斉木林策、沢祐（漢字：右側が石ではなく右）喜著**
小児の栄養法殊に人工栄養法についても説示。

1887年（明治20年）　**『医家十二要』伊勢錠吾郎著**
小児栄養品説、救急療法、仮死回蘇法等を記述。

1888年（明治21年）　**『児科必携』弘田長著**
多くの医家に読まれている。小児病を各器官について系統的に分類してそれぞれ原因症候等を述べ、殊に治療法は極めて詳細に記述している。

（参考）　『日本児科史』河内全節編（1898年/明治31年 ）　『日本医学史』富士川游（1904年/明治37年）
『日本小児科史』富士川游（1912年/大正1年）　『日本小児科医史』珠玖捨男著/南山堂（1964年/昭和39年）